

広島大学平和センター CPHU NEWSLETTER 2018

〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89
TEL: 082-542-6975 FAX: 082-245-0585
E-mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
Website: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa>



ご挨拶

「広島大学平和センター」としての新たな出発
“Only One”で“No. 1”の研究・教育施設を目指して

広島大学平和センター長
川野 徳幸



平和科学研究センターは、2018年4月1日より、「広島大学平和センター」に名称変更し、新たな出発をすることになりました。

平和科学研究センターは、2018年3月31日までの期限が限られたセンターで、2017年度までにその存続の見直しを行うことになっていました。今回、新たにセンターの必要性を検討した結果、設置期間を定めない「広島大学平和センター」に発展させ、平和に関する研究・教育において、これまで以上に学内外で「中心的役割」まさに「センター」を担えるよう機能強化を図ることとなりました。英語名称は「The Center for Peace, Hiroshima University」となります。

当センターは、これまで、国際シンポジウムや研究会、紀要等を通し、研究成果の積極的な発信を行ってきました。2014年からは、国内外の平和関連機関とのネットワーク構築事業も積極的に展開しています。教育活動に関しては、大学院国際協力研究科、総合科学部、教養教育で講義・ゼミを担当し、特に教養教育「平和科目」に関しては、その企画・運営において中心的な役割を担っています。2016年2月には、2008年4月から2015年3月までの諸活動に対する外部評価を受け、教育・研究・社会活動の各側面において、着実な成果を挙げていることが評価されました。

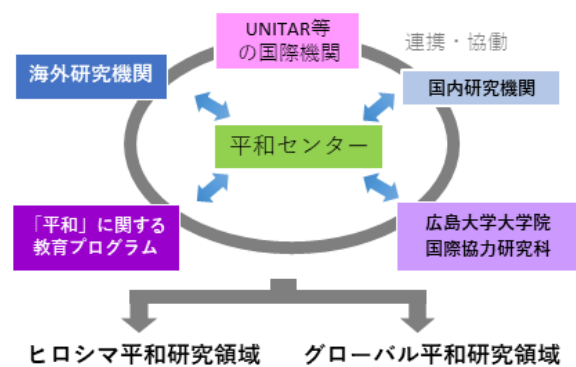
今後は、従来の業務に加え、「平和」にかかわる教育に積極的に参画する組織とし、その機能強化を図ります。次の図に示すように、学内に散在する平和研究、平和教育の組織・研究者及び国内外の平和関連機関との連携体制を整えるこ

とにより研究分野の特化と強化を行い、その成果を教育の場に還元します。教育面に関しては、教養教育にとどまらず、学内で展開する「平和」に関する教育プログラムにも主体的に参画します。また、研究面では、学内外に散在する平和に関わる研究者や機関と連携体制を整えて「ヒロシマ平和研究」領域、「グローバル平和研究」領域の2つの研究領域を確立します。そのほかにも、東千田理学部一号館跡地の保存・活用に関する企画立案にも積極的な参画を進めます。

平和科学研究センターは1975年7月8日に発足した日本最初の平和学の学術的研究機関です。この歴史ある伝統をしっかりと守りつつ、「平和センター」としての新たな歴史を作っていく所存です。

関係各位におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、センター紀要『広島平和科学』はこれまでの長い歴史と伝統を鑑み、今後も同紀要名にて発行いたします。IPSHU 研究報告シリーズに関しては、CPHU 研究報告シリーズとして、電子版にて発行を続けます。



2017年度のセンターの活動

シンポジウム

●2017年度第1回広島大学平和科学研究センター主催

国際シンポジウム

「原爆体験・戦争記憶の継承～託す平和遺産」

(2017年8月2日 - 約110名参加; 広島大学東千田キャンパスにて開催)

東千田未来創生センターにおいて、2017年度第1回国際シンポジウム「原爆体験・戦争記憶の継承～託す平和遺産」を開催した。シンポジウムでは、原爆体験・戦争記憶の継承の現状とこれからの課題について活発な論議がなされた。

<講演・パネルディスカッション>

川野徳幸 (広島大学平和科学研究センター長・教授)

「継承の課題：何が継承できるのか、何を継承するのか」

志賀賢治 (広島平和記念資料館館長)

「記憶の継承—次世代に引き継ぐ資料館を目指して」

基調講演 Glenn D. Hook

(シェフィールド大学大学院東アジア研究所名誉教授)

「沖縄の記憶と軍事基地の終わらない戦争」

特別講演 Andrew Hoskins

(グラスゴー大学社会科学分野横断研究教授)

「メディアと作られる戦争記憶」

Luli van der DOES

(広島大学平和科学研究センター外国人客員研究員)

「参加型継承のための原爆体験・記憶分析」

モデレーター：片柳真理

(広島大学平和科学研究センター副センター長)



パネルディスカッションの様子

●2017年度第2回広島大学平和科学研究センター主催

国際シンポジウム

「復興と平和構築」

(2017年11月18日 - 約80名参加; 広島大学東千田キャンパスにて開催)

東千田未来創生センターにおいて、2017年度第2回国際シンポジウム「復興と平和構築」を開催した。このシンポジウムでは、自然災害などからの復興と平和構築という、重なり合う二つの問題について多角的に議論し、東日本大震災で破壊された人の繋がりを回復するため、そしてコミュニティを復興するために進められた建築家の取り組みをはじめとして、復興と平和構築の分野で日本が国際社会に行い得る貢献や、日韓関係など歴史的なわだかまりを和解に導くため普通の市民同士が果たしうる対話の可能性、北アイルランド平和構築プロセスにおいて、女性の権利擁護等幅広い問題が議題に含まれたことなどについて、幅広く議論された。

<講演・パネルディスカッション>

基調講演 阿部仁史

(有限会社阿部仁史アトリエ代表取締役/UCLA 教授)

「復興とコミュニティ」

西田恒夫 (広島大学平和科学研究センター名誉センター長)

Hong-Kyu Park (高麗大学平和と民主主義研究所長)

Kate Fearon (欧州対外行動庁市民活動本部特別顧問)

モデレーター：片柳真理

(広島大学平和科学研究センター副センター長)



パネルディスカッションの様子

公開市民講座

●2017 年度公開市民講座

「原爆被害とは何か、ヒロシマは何を継承するのか」

(2018 年 3 月 10 日ー約 150 名参加；広島平和記念資料館にて開催)

* 広島平和記念資料館共催

広島平和記念資料館にて、2018 年 3 月 10 日に公開市民講座「原爆被害とは何か、ヒロシマは何を継承するのか」を開催した。川野センター長と原田教授は、最新の知見を含め原爆被害の実態を紹介した。志賀館長は広島平和記念資料館の今後の役割・可能性について報告し、Luli van der DOES 研究員は平和観光の可能性について報告した。最後のパネルディスカッションでは、ヒロシマの今日的な重要課題の一つである被爆体験継承について、約 150 名のフロアーを交え活発な議論を展開した。

< 講演・パネルディスカッション >

講演 1：川野徳幸

(広島大学平和科学研究センター長・教授)

「原爆被害とは何か」

講演 2：原田浩徳 (東京薬科大学生命科学部教授)

「原爆後障害と血液がん~骨髄異形成症候群とは~」

講演 3：志賀賢治 (広島平和記念資料館館長)

「記憶の継承ー次世代に引き継ぐ資料館を目指して」

講演 4：Luli van der DOES

(広島大学平和科学研究センター外国人客員研究員)

「原爆体験と「こころ」の軌跡を伝えるために」



公開市民講座の様子

研究会

●第 212 回研究会

(2017 年 7 月 10 日ー約 80 名参加)

今中哲二 (京都大学原子炉実験所研究員)

「これからのフクシマを考える」

●第 213 回研究会

(2017 年 10 月 31 日ー約 35 名参加)

黒木英充

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)

「シリア内戦 対テロ戦争 イスラーム」

●第 214 回研究会

* 第 388 回 IDEC セミナーと共催

(2018 年 1 月 26 日 - 約 40 名参加)

野添文彬 (沖縄国際大学准教授)

“The US-Japan Alliance and the Okinawa base issues a historical perspective”

●第 215 回研究会

* 第 389 回 IDEC セミナーと共催

(2018 年 2 月 27 日 - 約 20 名参加)

岩間陽子 (政策研究大学院大学教授)

“Nuclear Weapons and International Relations in Europe”

センター共催・後援・協賛のシンポジウム、研究会等

●2017 年 4 月 20 日

市民・被爆者が主役の講座(協賛)

「ヒロシマの理解・被爆者支援の実相と課題」

●2017 年 4 月 27 日

国連訓練調査研究所 (UNITAR) 広島事務所

第 90 回公開セッション (共催)

「アフガニスタンの現状と今後の展望ー日本の支援の役割」

●2017 年 5 月 20 日

広島大学大学院国際協力研究科

2017 年度第 1 回国際シンポジウム (共催)

「平和構築と信頼構築: 若者、女性、コミュニティをつなぐ」

●2017 年 9 月 30 日

日本中東学会第 23 回公開講演会 (後援)

「中東の戦争と平和 ヒロシマから考える」

●2017 年 11 月 12 日

世界の核災害に関する研究成果報告会 (後援)

●2018 年 1 月 25 日

第 5 回島根・セメイ国際シンポジウム (共催)

「世界の放射線被曝による健康問題~未来への新たな挑戦~」

出版物

●『広島平和科学』（第39号、2018年3月）

●研究報告シリーズ（和文）

No.55 山本政儀・川合健太・富田純平・美濃健太・坂口綾・大塚良仁・今中哲二・遠藤暁・川野徳幸・星正治・Kazbek Apsalikov・Talgat Muldagaliyev・Boris Gusev

「旧ソ連セミパラチンスク核実験場周辺集落の環境放射能汚染と被ばく線量再構築：サルジャー、カラウル及びカイナル集落とパプロダール州南部の集落」（2018年3月刊行）

●研究報告シリーズ（英文）

No.34 Editor: Institute for Peace Science, Hiroshima University

“2nd International symposium 2017 hosted by Institute for Peace Science, Hiroshima University “Reconstruction and Peacebuilding””(2018年3月刊行)

社会貢献など

●2018年3月3日 愛知県立時習館高等学校平和学習

SGH 事業発展学習－現地フィールドワーク講義「原爆被災被害の概要：物理的破壊・身体的障害・被爆者援護施策」

●2018年3月14日広島女学院中学高等学校

平和論文の審査・講評・表彰

●政治社会学会副理事長、読売新聞被爆72年被爆者意識調査（共同事業）、NGO ヒロシマ・セミパラチンスク・プロジェクト顧問、ひろしま平和研究・教育機関ネットワーク委員、Editorial Board Member of *RADIATION MEDICINE, ECOLOGY AND REHABILITATOLOGY*、公益財団法人広島平和文化センター理事、エジプト日本科学技術大学（E-JUST）プロジェクトフェーズ2 国内支援委員会専門部会国際ビジネス・人文学ワーキング・グループ委員、平和に係る教育・研究の導入機能等に関する検討会委員・座長（広島市）、NPO 法人瀬戸内里海振興会理事、西条・山と水の環境機構運営委員、エコネットひがしひろしま副会長、東広島市農業委員会委員 など

●新聞、雑誌等メディアでのコメント 19件

2017年度外部資金等受入状況

科学研究費補助金(代表)

●研究代表者：川野徳幸

平成 27-30 年度科学研究費補助金基盤研究（B）

『被ばく被害の国際比較研究：セミパラチンスク、チェルノブイリ、広島・長崎、福島』

補助金額：1,290万円（平成27-30年度直接経費総額）

●研究代表者：友次晋介

平成 28-30 年度科学研究費 基盤研究（C）

『コモンウェルス・勢力圏におけるイギリスの「平和のための原子力」協力』

補助金額：260万円（平成28-30年度直接経費総額）

科学研究費補助金(分担)

【川野分担】

●平成 26-29 年度科学研究費基盤研究（A）『カザフ核実験場周辺住民の放射性降下物被曝の実態解明-線量評価及び健康影響解析-』、研究代表者：星正治

●平成 26-29 年度科学研究費基盤研究（B）『世界の核災害における後始末に関する調査研究』、研究代表者：今中哲二

●平成 27-29 年度科学研究費基盤研究（C）『コンピュータによる『カンタベリー物語』諸写本と印刷本の計量的比較』、研究代表者：地村彰之

●平成 29-31 年度科学研究費基盤研究（C）『『カンタベリー物語』Hg, EI 写本及び刊本の編集方法とその言語・機能の研究』、研究代表者：中尾佳行

●平成 29-31 年度科学研究費基盤研究（C）『セミパラチンスク核実験場周辺に居住する子どもの放射線被ばく被害に関する研究』、研究代表者：平林今日子

【友次分担】

●平成 27-29 年度科学研究費基盤研究（B）『冷戦期欧米における「核の平和利用」の表象に関する研究』、研究代表者：木戸衛一

●平成 29-33 年度科学研究費基盤研究（A）『核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義』、研究代表者：岩間陽子

お知らせ

センターの名称変更に伴い、ロゴも一新いたしました。これは、原爆被害の惨禍から復興を果たしたヒロシマをイメージしています。まさに、平和センターが目指す二つの研究領域、原爆被ばく研究と復興研究を含む平和構築研究そのものを表したものとと言えます。このデザインは、Luli van der DOES 平和センター外国人客員研究員（JSPS 外国人特別研究員）によるものです。